ンティアで入った応援の職員の方々は、慣れた頃には、もう、交替してしまったと。ただ、汚い仕事を率先してやっていただいたというありがたみが、何かすごくこういうのが、やっぱり同じ福祉施設の中のあうんの呼吸みたいなものがあるのかなというふうな感じもしました。

最後に、地域力という話もありましたけれども、最終的には管理者なり、幹部職員の判断力っていうのはすごく求められるんじゃないかなということで、「判断力」というくくりにさせていただきました。利用者さんのいろんな思いもかけないような状態、一応、落ち着かせようとしているんですけども、いろんな不安の行動が出たってことで。毎月とか、年に何回とか、たぶんどこでも避難訓練を欠かさずしていると思いますけれども、結局最後は、こういう大きな地震っていうか災害になると、その時の状況判断、判断力が必要になるかなということで、納得させていただきました。

（以上、ワークショップ①の成果発表）

ワークショップ②

「現行の消防・防災計画の見直し」

【1班】

まず、「舞台を想定したマニュアル作り」というので、防災訓練のほうでマニュアルをもとに訓練を実施されていないということがあがりました。また理解しづらいマニュアルとなっているため、みんなが見てわかるものですね。複雑でないものを作っていかなければならないと。なおかつ全職員が周知する方法を考えていかなければならないのかなということが課題にあがっています。

次に「実効性の高い訓練」ということで、防災訓練の内容を見直さなければならない。例えば、避難場所の手段や方法などを明確にしておく必要性があるということがあがっています。

最後に「備えて活用しよう」ということで、備えてばかりで活用できなければ意味がないということで、備蓄品の内容を左右確認し、不足しているものを補っていこうということと、具体的な備品がいろいろとあがっております。あとは持ち出し品の内容や場所が記載されていないということです。いざというとき、意味がないということで、しっかり備え、しっかり活用しようっていうことで締めさせていただきたいと思います。

【2班】

「備える」と「動く」と、そして「つながる」ということで　3つにわけています。
まず、「備える」ことは何かというと情報、それから物品にわけてみました。情報は先ほ

ども意見が出ましたけど、衛星電話だとか、災害時の優先電話っていうのもありますので、そういったものをまず備えます。情報としてはそれが大事かなということです。物品としては、最初にも意見が出ましたけれども、要するに、地域の人たちが施設に来ることもある。そういった方たちの分も必要ですが、実は地方自治体と協議をして、施設が福祉避難所という指定を受けると、地方自治体から食料だとかいろんなものについて、こういうものをそろえてくださいということで、お金がもらえます。そういうこともありますので、ぜひ活用していただければと思います。それから、建物の耐震診断ですね。これも非常に重要です。新しく建てた施設であればいいですけど、ある程度古くなってくると診断をきちっと受けておく必要があると思います。

次に、訓練ですね。訓練マニュアルが必要だということと、訓練時の体制ということで、訓練もただ職員が訓練するだけではなくて、訓練を見て、批評する方ですね。そしてまたその上にもう1人、訓練時の責任者という体制をきちっと作って、マニュアルを作ってきちっと訓練することが大事だなということです。それから、避難時の誘導方法ももちろんそうですけれども、じゃあ、一体どこに避難するの。昨日の話では、避難予定の場所の天井が落ちたっていうようなこともありましたけれども、1カ所、2カ所、3カ所ぐらい、ここが1番だよ、ここが2番だよ、ここが3番だよっていう形で決めておくことが大事と思います。それから初動というところでは、まずこういう地震だとか火災が起きた時にはどういう体制なのか。例えば、施設長が命令を出すのか、その場にいる人が命令を出すのか、そうではなくて、誰かがという形まで、きちっと決めておく必要があると思います。第1次対応、第2次、第3次っていう体制ですね。それから地震があった時に、ここは震度6以上ってなっていますが、施設によっては震度5以上ならば黙って施設に集まることにするなど具体的に決めておく必要があると。それは、こちらからは連絡しなくても、自動的に職員が駆けつけてくるというようなか形だと。

最後に、「つながる」ということで、ネットワークが大事だよということです。ただ、このネットワークの時に、健康管理、要するに職員もそうですし、利用者もそうですけど、けががなかったかとか、物が落ちてきた時にけがをしたとかも全部確認し、建物もきっと点検しなくちゃいけないと。その上で地域とどうつながっていくのかということが大事だと思います。近隣施設との協定も必要だし、地域の防災組織がありますから、そういったところとの協力、市町村とも当然、協力が必要だと。それから消防署との連携も必要だし、ことによると地震の発生した自分の地域だけではなくて、例えばちょっと遠くの地震が発生してない施設に協力をいただくとか、そういうネットワークを作っていくことが大事だと。広域災害の支援協定とも必要なんじゃないかなということでまとめてみました。

【3班】

まず1つが連絡体制。今さっき言った職員の連絡体制含めて、確実な地域との連絡体制にすること。それから備蓄の内容、備蓄品については、もう一度、再点検していこうじゃ

ないかということです。それから教育ですね。訓練を忘れちゃいけないです。私が1つだけ感心したことは、うちの利用者が5.2という区分なんで、障害程度が重かったんです。私は気仙沼市の町の中にいて、施設へ戻るのに20分から30分かかるんです。津波におっかけられながら施設に戻ったわけですけども、普段避難訓練して、全員がまず中庭に避難させるだけでも、20分から30分かかります。その時は1次避難を終えて、2次避難で、車の中に。寒かったので、残っていた職員全員も車の中で、エンジンをかけてそこで待機しておりました。私が戻った時に、たった1人だけまだ乗らないでいたっていう状況で、私のほうがかえってびっくりしました。実際に職員が真剣になればなるほど、利用者も答えてくれるという、この教育の大切さを痛感した次第であります。

皆さん、同じような内容だと思うんですが、一番大切なのはこの見直しだと思います。普段やっている中で、準備しているからいいだろう、あるいは訓練しているからいいだろうじゃないけれども、もう一度、本当に真剣になってやっているか、具体的な面ができているか。あとは地域ではないけれども、実際に訓練されているか。職員が足りない時は、同じような職場をやっているところでお互いどうやって助け合えるか、その連携を取ることが大事じゃないかなというように考えています。取りあえず、見直すことをもう一度フィードバックしてやることが大切だっていうことが改めて感じた次第です。

【4班】

まず、「事前の備え」ということですね。それがやっぱり不足しているのではないかということで、いろいろお話が出たんですが。やはり備蓄品の品目が不足していることと、備蓄品をどこに置くかということがやっぱりすごく重要ではないかということですね。また、備蓄品については、自分の事業所の方だけではなく、地域の人たちの数も含めて、そういうニーズもきちんと捉えながら、数も準備しなくちゃいけないんではないかというお話も出ました。

次に、「発生後の対応」ですが、初期に役割分担なんかを明確にしておかなければならないのではないかということ、あとは職員の確保ですね。事業を継続するにあたっては、職員をどのように確保していくのかっていうところを、きちんと計画を立てておかなくてはいけないってことですね。事前の備えでは、訓練・防災教育ついて、具体的に、かつ計画を立てた訓練が必要なのではないかということです。

さらには、備蓄品が足りない時に、地域の方たちとどのように連携をして、物品を確保するのかということです。あとは地域の方を受け入れた時に、具体的にどのように震災後の生活を維持していくのかということもきちっと考慮していかなければならないのではないかということですね。

最後になりましたが、私たちは入所型の事業所をイメージして考えたんですが、これが通所とかグループホームとかの方たちの計画となると、またさらに違ったものになるのではないかということが出されました。

【5班】

まず、安全があって、生活があって、それで施設の再開があると思います。その中で、どちらかというと生活っていうか、うちの班では特に備品とか、そういうのを中心に話し合いをしました。

それで、3月11日、うちも避難したものですから、その際に灯油とか、カセットコンロがないこと、一番困ったのは光がないことです。利用者の親御さんにもらった大きなロウソク1本だけでしたが、やっぱり明かりがあっただけでも違ったんです。例えば、女性の方がトイレに行くことが大変で、それで防災用ELDのライトを各部屋につける。そういうこととかですね、ソーラーライトを各駐車場のフェンスにつけるとか、あとランタンとかロウソクはやはり必要と思って、買わせてもらいました。ほかに情報の連絡手段です。携帯とか電話はすぐ止まりましたが、衛星電話は停電になっても使えますので、あってもいいんじゃないかということで書かせてもらっています。

3月11日はとっても寒かったです。うちも反射式ストーブがなかったんですね。親御さんからあまりにもかわいそうだっていうことで2台ほど持って来てもらって、何とかしのいだんです。こういう電気に頼らない昔式のストーブが必要だと思います。

あともう一つは発電機ですね。これがないまま、携帯電話を使っていると全部止まっちゃうんですね。

もう一つは時系列で必要物資が変わっていくんですね。ここで自転車って書いていただいた方、いるんですけれども、本当に自転車が、2カ月の間ぐらいは、特にガソリンがない時ですね、活躍しましたので、本当に必要だなあと思いました。

施設では、個人情報の持ち出しとかリストとか、危険物品等の転倒防止、それを具体的にやっておかないと。実際には、何カ所かは忘れていたりとか、そういうところでガラスが壊れたとか、何か危険なことが起こると思いますので、その点が書いてあります。

あと、予防とか訓練ですけども、取り扱うことと訓練ですね。結局、発電しようと思っても、いざやったらガソリンがなかったとか、使い方がわかんなかったとかで、できるだけ多くの方に訓練とかで取り扱っていただくと。

情報といたましては、災害用ダイヤルは、1日と15日は無料で練習できますので、訓練を何回かやるとか。あとは衛星電話ですね、こちらのほうを設置とかで情報を親御さんとか職員とうまく活用できればいいのかなっていうことです。

【6班】

「かけ声」班はコンパクトに三つということで、まずは安全の確保。利用者と職員の安全の確保を具体的にまず書こうということです。あとは備品、先ほどから言っている通りなんですが、石油ストーブとか非常食とかいろいろありますが、DVDとかゲームなど、われわれは、実際に音楽を流して助けられたっていうことがあるので、精神的な観点からいうとDVDとかがいいのかなということであげました。

あと事前の防災計画では、それぞれ計画、地域の人との連携だったりとか、避難方法だったりとか、そういうことはあるんですが、災害時の優先電話の指定について、指定してもらうと優先的にかけることができるのかなと思いまして、連絡網の整備ということで書きました。あとはだいたい皆さんと、同じような感じで書いていると思います。

【7班】

まず、皆さんが言われているように備品ですね。備蓄はどういったものをどのぐらいということに注目したグループと、そのほかの生活用水や燃料をどのように確保するか、または事前に確保が難しい場合に、どのように決まり事として決めておくか、例えば、行政と協定を結ぶ等も含めて。あと薬ですね。服薬、これも手段の確保ということが大事かなと思います。そのあたりで「備蓄調達」というくくりをしました。

もう一つ、保護者と施設の間、または職員間ですね。施設の職員間でどのように連絡をとるかというのは、孤立して離ればなれになる場合もあり、連絡手段を何段階かで決めておく必要があるんじゃないかと考えました。あとは個人の情報や緊急連絡先の情報、また服薬内容等の情報についてもどのように持ち出す仕組みを作るのか、またそれをどうやって管理するのかっていうあたりを一つのくくりにして、「伝達・確認」という名前にしました。

もう一つですけれども、平時の防災教育として、職員の教育や、また避難時の職員体制とか、どういう行動をとるかっていうことについても、やはり決めておくにこしたことはないと考えまして、職員の平時・非常時っていうことでまとめました。

あともう一つは番外編になりますけども、自閉症の方の避難場所とか、なかなか普通の避難場所で対応できない方のことについても、やはりそれぞれの事業所の利用者の顔を見ながら考えておく必要があるなど。あと、これは避難時とかそういったことに関わらず、誰か所在不明になった時のマニュアル等が整備されていると、こういう時に役立つんじゃないかということで、これも大事だなということで、「これも大事」にしました。

（以上、ワークショップ②の成果発表）

ワークショップ③

「事業継続計画策定に向けてのボトルネックと解決策」

【1班】

まず、大きく、当初の混乱というグループにわかれて、次が安全の確保とか不安への対応というものになりまして、最後に、いざ避難する時の利用者の状況とか、特性とかの把握という、だいたい大きな3つのものにわかれました。

最初に「指示・命令の混乱」ということで、これはやっぱり役割を明確化する。指導、施設内の確認とか車の手配とかいろいろなものの具体化を指示する人を、状況に応じて明確に決めておくことが第1点です。

次に、とにかく全員ちゃんと避難できるのかとか、避難場所は大丈夫なのかという不安に対して、日常的な訓練をして、避難路のチェックや整備をする。つまり普段から訓練をして、地域の協力体制とか、職員の駆けつけることを、きちっとやっておきなさいよという点です。

最後に、避難する利用者さんが避難に応じないとか動けないとか、もろもろの状況がございますので、避難に応じない利用者などの課題に、きちっとみんなに声をかけて、逃げ遅れないように体制を整えることです。これは、日頃の訓練とか、利用者の障害特性とかですね、行動の特徴、どういうパニック等が考えられるのかっていう情報を把握して、避難誘導する人が共有できるような体制にすると。

【2班】

まず、ボトルネックとして、災害情報、もう一つは避難経路、それとマニュアル、地域という4つが出されております。

災害情報として、情報の把握、災害の内容の情報、被災状況の把握等です。解決方法については利用者名簿、職員名簿の置き場所、それと情報の共有、情報の収集、職員の連携と訓練、ラジオ、ワンセグを準備するという方法になっております。やはり今、電池でなくて自家発電できるようなラジオが出ておりますので、きちっと情報を集めて、ラジオを聞いて情報を把握することです。

あと避難経路について、迅速かつ安全確実な避難経路の確保、避難経路の安全性等を出されております。これについての解決方法については、訓練マニュアルの見直し、訓練の工夫、繰り返しの訓練っていうことが大変大事だということです。

それと、マニュアルについて、ボトルネックのほうですけれども、この中に利用者ごとの避難支援マニュアル等を入れることが大事ではないか。それとあとは、マニュアルでは、ただのマニュアルだけではなくて、利用者同士が協力し合って避難することが大事なことではないか。あと、利用者のパニック、意欲的に参加、自律的な避難、職員の確保というボトルネックが出されております。その中で解決方法としては、施設への集合体制、計画書の作成、あと詳しいマニュアルの策定です。例えば、マニュアルを細部にわたり作成して、周知徹底させるということとが出されております。

最後に地域ですけれども、職員が最少の場合は、地域住民との連携・協力、避難に地域の協力ということが出されております。この解決方法として、隣の施設や公共施設と災害協定を締結しておく、また災害時の支援協定を結んでおくことや、平時から交流するなどの解決方法が出されております。

【3班】

まず、ボトルネックとして、場所と人、生活でメンタルと物資という形をあげました。

場所のほうは避難所の確保という指摘がほとんどでした。こちらのほうは、事前に新しい場所の準備をしておく、公的施設の利用法の協定等も事前に結んでおく形で、想定して準備するということでした。

あと、人ですが、職員の確保がやはり、皆さんから出ました。また、事業所との調整、ボランティアとの協力体制、OB職員、地域との協力等の関係性の確立等が出ました。あとは、そういう形でいろんな方面に対して、いざとなった時に人の確保ができるような体制に整えることが話に出ました。

あと、生活ですが、生活の中では、一応、食べるための物資とか、生活に必要の物とかが必要になるということで、そちらは事前に準備、そして確保もしておく必要があるということです。また、メンタルケアについて、利用者と支援者のメンタルケアっていう形で、救護室の確保、カウンセリング相談支援、あとは職員の支援、業務を分担することや、利用者の行動パターンとかそういうものを周知して、いざというときに対応できる体制を整えておくべきではないかということでした。

【4班】

まず、出たのは、皆さんと同じような感じで、まず職員スタッフの確保、次に協定しておくことです。場所でも、やっぱり居住空間ですね。特にパニックを起こす方々はいわゆる居住空間、例えば、体育館に避難した場合のどうやってその場所を確保するか。私も津波にあった経験上ですが、場所は大抵のところ、早い者勝ちなんですよね。早い者勝ちなので、ほかの人たちが入っているのに、まさかドーンと行くわけにいかないので。あと、場所は当たり外れがあり、運もあります。

あとは物です。それをどう確保するか。それはまず事前に用意しておくということもありますが、ただ、今はこうやっていますが、実際問題として自分たちだけが被災しているわけじゃないですよね。ほかの方も被災していることが、一番の問題です。

解決策として、スタッフを確保ことは無理です。道路がなくなっていますので歩けません。道路もないし、車も動けないっていう、これは、大船渡からどうやって本当に人を確保するかっていうことがまず、今後の課題だとは思います。場所もそうですよね。避難するにしても、山のほうに逃げたら、そこに場所はないですね。山っていうのは狭いですから。そこはもう、どうやって本当に確保するかっていう。

あと、物もですが。自分たちだけに確保しても、地域の人たちにもわけなきゃない。経験上、私たちが確保しても地域の方々の分も全部、自衛隊さんとかも含めて、全部お願いして、全員の分、在宅の方々の分の名簿を作って全員分を確保しました。全部数を歩いて配達しましたので、その点を考えいくことが、これからの課題だと思います。

【5班】

うちのグループも自分とこはだめだということで、ほかのお世話になるという時の設定で検討しました。

まず、職員が集まらない。それでも手が足りない場合は、足りないので、ほかに手伝ってもらえばいいじゃないかと。ただ、その場合、その方たちは情報がないので、個々の利用者に対してのサポートリストを用意しておけば、それが割とすぐ解消できるんじゃないかなと。

もう一つ、避難所もいろんな人たちが来て、混乱しているでしょう。利用者の方がはぐれた場合、どこの誰なのか、どうしていいのかわからない場合は、少なくとも所属と名前でも書いたバッジを用意してパッとつけておけば、もしそうなった時に、「あ、そうか」っていうことで連れて来てもらえるんじゃないかなって。それからお薬は持って行けばよい、そのために飲むコップ、水も持って行けばよいだけじゃなくて、中にはやっぱり高カロリー食とかそういった栄養も必要な方もいるだろう。であれば、それも水などと一緒に準備して持って行けばよいではないかなど。あとは、避難所でほかの方たちへのマイナスの影響をなるべくなくしたいために、事前にお世話になることを説明して、事前に専用の部屋を決めておくことも必要と思っています。

最後に、次の部分になるかもしれませんが、やっぱりお風呂、入れないっていうのも精神的にもつらいだろうということから、お風呂が入れればいい。そのために、なるべく早くお風呂に入れる情報を流す必要があるのではないかという話し合いをしました。

【6班】

福祉避難所にということを想定して話しました。大きく三つのくくりっていうことであったんですけども、なかなかくくりができなくて、真ん中で区切っています。

まず一つは情報の関係ですね。それからもう一つは食材とか水の関係とか、あるいは利用する人たち、来た人たちの生活空間の確保であるとか、本当に生活に密着する部分の配慮っていうことです。もう一つは、衛生管理を含めた感染症対策、そういうふうなことを、今、無理やり三つのくくりとしました。

情報については、受け入れる側のほうがきちっとした形で受ける必要があるだろうと。時には、避難してきた人たちから外部のほうに情報を発信するための手段、そういうのが必要ではないかと。先ほどから言いましたけれども、電話の関係であるとか。

あとは食材であるとか、生活場所の確保であるとか。生活空間については、やっぱり、例えば、私たちの施設であれば、何人ぐらい、じゃあ、受け入れできるのかっていう、普段から数字を提示しておく必要がある。その部分のものを少なくとも準備しておく。水にしても食料品にしても。いろんな人が利用するっていうことを考えると、例えば、おかゆでないと食べられない人とか、そういう人もこっちにいるわけですから、その想定をしながら、いろんな人を受ける形で。受けるための準備が必要ではないかなと思います。

あとは感染症とか衛生管理の部分では、薬はもちろん、あとやはりおむつであるとかマスク、ゴム手袋などが出されました。もちろんそういうものを備えておくことが必要ですが、例えば、簡易の入浴設備を整えておくとか、風邪とか、予防するためには、やっぱり暖房や石油ストーブなどをきちっと普段から準備しておく。いざ、受け入れた時にそれを活用して、受け入れる。避難してきた人のいろんな生活を守ってあげるっていう備えが必要ではないかなということで。

【7班】

まず、「福祉避難所として受け入れる際のボトルネックと解決」ということで、たくさんあげていただきました。まず人手の確保っていうところが一番ネックになってくるかなと思います。支援者ではボランティアの確保です。解決策としては、関係機関への依頼ですとか、福祉団体への要請、市町村と連携をしてボランティアを確保することも必要になってくるのかなと思います。しかし、専門性の高いケースも出てくると思うので、そういったところの担保というか、それが大きな課題になるかなと思います。

最初の必要事項として、福祉避難所のルールをある程度明確にしておくことが出ています。受け入れのマニュアルですとか、要援護者の基本情報をどうやって収集をするのかということです。おそらく受け入れの窓口とか、手順とか、退去についても、いろいろ調整が必要になってくると思いますので、マニュアル化と職員の研修も事前に必要になると解決のほうであがりました。

避難所では、ある程度物資は約束していただけるのかなというところで終わりました。例えば県とか各市町村と連携をして、物資を調達するという一つの方法があるんですが、これも体験として、どうしても行政の縦割りっていうことで、そこが県指定の避難所、市町村指定の避難所によって物資の流れが全く相違していました。お困りの方はみんな同じなので、どっからもらっても一緒だと思うんですけども、実際問題として、物資の配給先とがいろいろわかれていたりしたので、もうどっちでもいいから早くくださいという感じでした。実際のところは振り分けしている時間もないですので、そういうことの整備もあらかじめ必要なのかなと思いました。

（以上、ワークショップ③の成果発表）

資料5　ワークショップに関するアンケート調査（自由記述）に基づく「良好な点」と「改善すべき点」

ワークショップに関するアンケート調査（自由記述）

良好な点

●改めてBCPの必要性を感じ、作成の必要性を痛感しました。
●二日間の全てが勉強になりました。
●各テーマに沿った話し合いの中で、自事業所に参考になる点が多くあり、参考としたい。また、KT法によるワークショップは、職場にも導入したい。現在、作成されている防災マニュアルと対比できて良かった。（検証作業で同様に様々な意見を交わす中で作成！）
●単なる計画ではなく、より具体性、十分性、仕組みのどこを見直せばいいのか理解できた。
●改めて災害時の対応について考えさせられた。
●福祉施設のBCPとはどのようなものか、作成上の留意点、重要性が良くわかった。岩手県知福協として、大災害時の被災会員事業所の支援方法を検討しており、BCPを意識した形にしたいと思っていたが、そのイメージを把握することが出来た。
●災害や、災害への対応について、公的な支援や民間ボランティア等の支え等情報の多い中、頭を整理できて良かったです。
●他の施設（通所・入所等）の状況や対応法を知り、自分の施設の対応見直しに役立てたい。
●事前の準備が大切であることを学びました。
●様々な事業所の状態や意見を聞き、被害が大きかった地域の方から、その時の対応や事後に行ったこと、不足部分などを聞くことができ、被害が少なかった私達の施設では得られないことを知ることができたので。
●正常化の偏見はなかなか気づけないことでした。秋田県は震災の被害は非常に少なかったものの、停電、断水、ガソリン不足などを経験しました。しかし、それ以上のことを考えておかなければならないこと、BCPを策定すべきことなど、これまでになかった知識や現実を知り得ることができました。
●他施設の体験談を聞くことができ、不備な点が明確になった。
●事業継続のための具体的な手法がわかり実務的に見直しをする良いきっかけになった。
●3.11で被害にあわれた施設の、生の声が聞くことができてとても参考になりました。
●震災時における計画は、今取りくみ始めたばかりである。今回の研修は、計画の視点を考えるうえでたいへん勉強になった。
●福祉施設における、BCPの重要性とその作成についての多くのヒントをいただいた。
●BCPについては全く考えていなかったが、その必要性を自覚でき、幾つかは具体的な取り組み方が学べた。
●防災計画に盛りこむべき内容を改めて確認することができ、多くのことを得ることができました。やはり細部にわたって普段からの備えの必要性を強く意識することができ、

今後の施設における防災に役立てていきたいと思います。どうもありがとうございました。

●被災した地域、施設の方々の具体的意見が大変参考になりました。

●大きく被災を受けた皆様のお話を聞けたことは、非常に貴重な時間となりました。同時にマニュアルの見通しの甘さや、整備等、課題が浮き彫りになり、今後に生かしていかなければと思いました。

●マニュアルの見直し，防災計画の見直し・具体化

●防災計画を立てたいと考えておりましたが、どのように作成するのか、わからずにいたところでしたので、大変参考になりました。実際に災害状況がひどい施設や事業所の方々の話を聞けたのは、とても参考になりました。

●防災対策（計画）作成の必要性。今までは火災が中心だったので。

●現在施設では、消防計画はありますが、震災に対する計画は、給食部門しかない中で、非常に重要だと思いますし、早急に作成したいと思います。

●他事業所の被災の生々しい状況。それを元に対策を検討されている点は参考になった。

●現在のマニュアル等の検証が出来ました。

●災害での体験を忘れない様、繰り返し、防災対策を練り直し、訓練などを行っていきたい。

●東北各県の関係者の声が聞けた。みんなが自分の考えを発することが出来た研修様式であった。今回は、地震自体の被害だけであり「正常化の偏見」という言葉の意味を強く感じた。自分の考え方の見直しになった。

●一人一人の経験が、それぞれに個別性高い。広い見識を持つ上で刺激受けた。様々な状況を想定する上でのヒントが多数いただけた。

改善点

●BCPの重要性を確認しました。施設で防災ワークを実施しようと思いました。一方で地域の生活障がい者の被災及び支援の在り方が必要ではないか。

●ワークショップというスタイルで、課題について話し合い、情報を共有できたのは有意義であった。　各施設の防災計画など、参考資料として手元に残ると、より具体的に当施設や法人の計画に反映されるのではと感じた。

●少なくても学んだことを利用して、施設の計画を修正していかなければいけない。できればどのような視点が必要かだけでなく参考例も、もう少し欲しかった。

●福祉事業所として、どの施設でも、いつでも災害が起こることを想定してマニュアルのあり方を考えなければいけない。一度マニュアルを整理したから良いではなく、見直しなどを行い常に状況に沿った事を考えることが必要。

●防災対策の準備、訓練の重要性と、BCP作成の意義。また『正常化の偏見』は確かにある。一方で，マニュアル化の必要性は充分理解できたが、あまり詳細にすると枚数が増えて実際の災害時に機能しないのではないかという心配。いかに、簡潔にわかりやすく作るかが課題。

●いろいろな県、法人施設の皆さんの災害時の対応や、マニュアル、利用者への対応などが、聞かれ、大事な事、不足していることを再認識できました。現在の自分の施設に持ち帰り、今後の防災計画、BCP作りに生かしていきたいと思います。原発事故時の避難した際、利用者及び職員の精神面、生活面でのケア等も考えていく必要がある。
●2日間という短い期間なので、やむを得ない。長い時間が必要である。

Ⅲ．研究成果の刊行に関する一覧表

研究成果の刊行に関する一覧表（1/2）

書籍

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書籍名	出版社名	出版地	出版年	ページ
内山登紀夫	こころのケア 福島県の子どもと家族の方々へ	日本自閉症協会	自閉症の人たちのための防災・支援ハンドブック		福島	2012	
吉田香織, 内山登紀夫	療育の実際－総説	市川宏伸,内山登紀夫編	発達障害 －早めの気づきとその対応－	中外医学社	東京	2012	123-129

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
金子　健	東日本大震災から学ぶ	特別支援教育研究	665 号	58-59	2013
金子　健	東日本大震災から2年／聞き取り調査の結果から	手をつなぐ	685号	6-7	2013
Tsuchiya KJ, Matsumoto K, Yagi A, Inada N, Kuroda M, Inokuchi E, Koyama T, Kamio Y, Tsujii M, Sakai S, Mohri I, Taniike M, Iwanaga R, Ogasahara K, Miyachi T, Nakashima S, Tani I, Ohnishi M, Inoue M, Nomura K, Hagiwara T, Uchiyama T, Ichikawa H, Uchida H, Kobayashi S, Miyamoto K, Nakamura K, Suzuki K, Mori N, Takei N.	Reliability and Validity of Autism Diagnostic Interview-Revised, Japanese Version	J Autism Dev Disord		Epub ahead of print	2012
Uno Y,Uchiyama T.	The combined measles, mumps, and rubella vaccines and the total number of vaccines are not associated with development of autism spectrum disorder.	The first case-control study in Asia.		Epub ahead of print	2012
Ito H, Tani I, Yukihiro R, Adachi J, Hara K, Ogasawara M, Inoue M, Kamio Y, Nakamura K, Uchiyama T, Ichikawa H, Sugiyama T, Hagiwara T, Tsujii M	Validation of an interview-based rating scale developed in Japan forpervasive developmental disorders.	Research in Autism Spectrum Disorders	6(4)	1265–1272	2012
伊藤大幸,行廣隆次, 内山登紀夫, 黒田美保他.	日本版Vineland-II適応行動尺度の開発　不適応行動尺度の信頼性・妥当性に関する報告	精神医学	54（9)	889-898	2012
内山登紀夫	広汎性発達障害とｽﾍﾟｸﾄﾗﾑ概念	精神科治療学	27(4)		2012
Kyoko Tanaka, Tokio Uchiyama and Fumio Endo	Informing children about their sibling's diagnosis of autism spectrum disorder: An initial investigation into current practice.	Research in Autism Spectrum Disorders	5	1421-1429	2011
田中恭子、内山登紀夫	発達障がい児への支援の基本的な考え方	小児看護	35	534-540	2012

研究成果の刊行に関する一覧表（1/2）

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
内山登紀夫	大人の自閉症ｽﾍﾟｸﾄﾗﾑ障害の診断	治療	94(8)	1376-1380	2012
蜂矢百合子，内山登紀夫	3歳から就学年齢までの場合	小児内科	44(5)	714-718	2012
吉田香織，内山登紀夫	広汎性発達障害の心理社会的支援をめぐって.	Pharma Medica	30(4)	33-36	2012
内山登紀夫	東日本大震災から2年／福島の現状と求められている支援	手をつなぐ	685号	10-11	2013
吉川かおり	東日本大震災から2年／生活再建に欠かせないこと	手をつなぐ	685号	8-9	2013
鍵屋一	災害時要援護者支援の新たな展開 －福祉事業所の防災・事業継続を考える	地方行政	3月25日号		2013
鍵屋一	東日本大震災から2年／被災時の防災を事業所と一緒に考え	手をつなぐ			
柄谷友香	東日本大震災後の地域・生活再建を支える「中核被災者」の役割と可能性 －陸前高田市の自主防災組織による避難所運営課題を事例として－	総合学術研究論文集	第12号		2013

Ⅳ．資料（被災地でのヒアリングの概要）

1. 岩手・宮古市／親の会

ヒアリング実施日：2012年8月28日
参加者：5名（母親の立場）
子どもの障害種別：重症心身、肢体不自由、知的障害、難病
子どもの年齢：学齢～成人

概要

津波被害を体験した、障害児者の母親5名にグループヒアリングを行った。震災直後の状況から、現在の避難生活に至るまでを自由に会話してもらった。

重症心身障害児を連れての避難の苦労と、地域や自宅の損壊が少なかった場合には避難を受け入れる・物資を供給する側の話も語られた。

障害児者の被災後の変化には、悪化した面と好転した面とが見られた。

1）発災時

①障害児者：重症心身障害の子供は、月1回のリハビリの日だったので社協にいた。他の障害の子供は特別支援学校にいた。成人している人は通所施設にいた。

・たまたまその日は、重心（重症心身障害者）の子はみんなリハビリの日だったので、みんな社協に来ていました。

・バスも、学校でまだ走らない時刻だったので、いろんなことが重なって、子どもたちもみんな無事でした。

・子供は通所施設にいて帰る支度をしていました。それで地震になって、向かいの公園にみんなで避難しました。そのうちに私も外に出たりしましたが、広報車が回って歩いて「大津波が来る」と言われても、本当に来るのかと思って、実感が湧きませんでした。それで、施設の人たちがみんなで逃げようということで、高台のほうに動いたので、私たちも一緒に移動しました。

②親：自宅にいた。社協にいた。親の会でやっている施設にいた。

・地震が終わってすぐ、沿岸部の親戚2所帯がタクシーでうちに避難してきました。うちも1階は津波で壊れました。

・社協の中で、電灯の下にいたので、子供を抱っこをして場所を替えました。重たかったけど、「まあ、いいや。すぐ終わるだろう」と思ったら全然終わらなくて、窓の外を見たら、みんなが駐車場に少しずつ避難に集まってきました。「どうやって行けばいいの？」とパニクってしまって、エレベーターに行ったら動かないので、「じゃあ、子どもは抱っこしかない」と抱っこして。

・親の会でやっている施設の職員さんたちが、ここからすぐ近くにある小学校に利用者さんを誘導して歩いて避難しました。施設の裏手に住んでいるおばあさんたちも避難させなければと、そういうときは車を使わないようにということだったので、私と他の職員と2人でおばあさんたちの手を引いて歩きました。途中で歩くのがままならなくなったので、自家用車を近くに止めていたので、それを出して小学校まで行きました。

2）情報入手

・ラジオはつけっぱなしにしていた。

3）避難時

①その日のうちに、子どもと一緒に逃げた

・私は、子供を乗せて学校に迎えに行きました。

・社協の職員の人が毛布を持ってきてくれたので借りて、「どうしますか」と言われましたが、「とりあえず、ここで迎えの車が来るのを待っています」と駐車場で待っていました。職員の方が「私たちは小山田のごみ（処理場）のほうにみんなで避難するから」「何かあったら来てね」と。ごみ処理場は暖かいので、そちらにみんなで行くからということで、「じゃあ、もし何かあったら行きます」と。そのうちに娘が来たので乗って、「じゃあね」とそこで別れて、普通に帰ってこようと思いましたが、もう止まっていると。そこで、今度はバックしてくるので、みんなそこでぶつかったり何だりしていました。でも、このまま帰ると絶対……。そのあと雪も降ってきて、川の水がだんだん引いてきたのが5時過ぎで、子供も大変だし、ここにいてもしょうがないと思いました。車のエンジンはずっとかけっ放しにしなければいけないと思ったり、とりあえず走るだけ走ろうと思い、自宅に向かいました。

・合庁（合同庁舎）に行って、そこで3泊4日しました。

②子どもと別々に逃げた

・友達と一緒に支援学校に娘を迎えに行こうとして走ったら、ちょうど橋の上で津波が上がってくるのが見えました。たまたま橋の上にいた男の方に、「これ以上行っちゃだめだから、早く戻って戻って」と言われたので、そこでUターンしました。ちょうど道路の上のほうに山がありますが、皆さんがそこに避難していました。それで、私も友達と2人でどこにも行けないからとそこで……。ラジオはつけていて、そこで橋のところに津波が上がってくるのを見ましたが、まさかそんな大きい津波だとは思いませんでした。でも、走れないし、子供は学校に頼んでいたし、「じゃあ、今晩一晩車で過ごして、明日の朝早く迎えに行こう」と言って、友達と2人でいました。2人で一晩過ごして、朝6時頃だったか、明るくなってみんなが動き出したので、私たちも迎えに行こうと思って、いつもの道で市役所のほうに行こうとしました。そうしたら、宮高（岩手県立宮古高等学校）で消防の人に「どこに行くの？」と止められて、「実は、こうこうで支援学校に子供がいるんで、迎

えに行きたいんですけど」と言ったら、「いや、もうこれ以上は通れないよ」と言われました。
・ちょうど子供は施設に行っていて、園長先生が、「どうだい？」とすぐに電話をくれて、うちにも（水が）入ったと。それで、「子供さんはこっちで預かるから、心配しないであれして」と言った途端に電話が通じなくなって、それから十何日も電話が通じませんでした。
・金曜日で、子供はケアホームから自宅に帰る日だったので、帰る日なのに何かが起きて避難しなければならないということで、みんな一緒に振興局の3階とかに避難したようですが、何が起きたのかわからない。津波の波が押し寄せるのも見ないまま、建物の外に逃げようということで逃げたために、何が何だかわからない。時間になっても帰れないということで、その辺りからずっとパニック状態が続いていたようです。5時にやっと水が引きました。それから行ったら、セルプ（社会就労センター）の園長さんとたまたま会って、「子供さんは大丈夫。うちで預かるから、今夜は大丈夫」ということで、大丈夫かなと思いながらも、私は戻ってきました。

4）避難先

①避難所など

・中学校が避難場所でしたが、うちの子供は重度だし、やっぱり連れていけないなと。
・たまたま特別支援学校で見てくれていたからそのときはよかったです。
・特別支援学校で見てもらったので、すごく安心でした。担任の先生が、いつもすごくよくしてくれています。学校に4日間お願いしていましたけど、やっぱりずっとはお願いできないし、あと、てんかんを持っていて、ちょっと環境が変わったりすると発作を起こすのが一番心配でした。その前からショートとか日中一時で療育センターを利用していましたが、学校の先生のほうから、「お母さん、避難所は大変だから、療育センターにお願いしたらどうですか」と。でも、私は、そのときはそれも考えないで、車のガソリンとかも頭に全然なくて、じいちゃんたちを捜そうといろんなところを何回も走っていました。娘の学校も何往復もしました。4日目に盛岡市の療育センターに連絡を取り、最初はお泊りで長く泊めるつもりでしたが、「先のことが分からないので、この際、入所にしましょう」と園長先生に言われたので入所させました。
・子供は学校にいたので、じいちゃんとばあちゃんとお父さんと私と4人で避難場所にいました。
・子供にとっては避難所は3泊が限界でした。夜、寝ていませんでした。もちろん、板の間かコンクリートの上で、それでも、1日目は新聞紙を敷いて直接寝ました。2日目からは毛布があったりしてその上に寝ましたが、本当にびっちり体をくっつけて寝たり、やっぱり限界かなと。比較的おとなしくて、我慢もしていましたが、あの人もだんだんキレてきました。避難所の生活というのは、だんだん2日目、3日目になると、非難の音声みたいな

ものが、あそこの前がどうだとか、それはすごく感じて、嫌だなと思いながら。

②家族・親族

・ちょっとした荷物だけを持っていとこのうちに上がっていって、そこで何日か泊まりました。でも、電気は来ないし、水は止まっているし、大変でした。うちの息子は、たんが出るので吸引しなければいけなかったのですが、充電式の吸引器があって自家発電ができました。そのおかげで充電しながらやりましたが、何しろ寒かったです。

・家にあった反射式のストーブを持ち込んで、一晩ずっとたいていました。そういうのがいろいろあったので、何とか無事に。電気がついたので、大丈夫だろうと家に戻りました。

③自宅

・自宅は1階が津波で壊れました。子供は施設に2週間ばかりお願いして、うちのほうは何とか暮らせるように大工さんが入ったり何かして、2週間ぐらいたってから子供を迎えに行って、3カ月ばかりうちにいました。

・2日か3日ぐらい前に病院に行ったばかりだったので、薬はあるし、おしめも買ったばかりであるし、もうすべてそろっていました。ああ、流されてなくてよかったと思いました。胃瘻で飲むのも全部そろっていて、1カ月分はありました。その次に病院に行くまで、子供は自宅から一歩も出ませんでした。

・次の日、私が夫と迎えに行ったら、やっと帰れるということで、ちょっと落ち着いた顔をして一緒に来ましたが、その当時は車も全く使えないところだったので、歩きながら、「ほら、見なさい。こういう状態だよ」と言ったら、それで初めて自分の目で津波を見て、「ああ、こういうことだったんだね」と。重度の知的障害があっても、やっぱり違うということで納得したみたいで、うちに帰ってからは、水が出ない、電気がつかないといっても、ろうそくの光をともしながらというのが楽しかったのか何なのか、特にあまりおかしくなることもなくて、何とか生活ができました。

5）物資の調達

①直後・自宅避難

・湧き水があったので、それが利用できてすごく助かりました。

・ガスもないし、電気もないし、ご飯支度が大変でした。でも、灯油のストーブでご飯を炊いたりおかずをあれして、2階で暖房も取って、食事のあれも外でやってという暮らしをしていました。一番いっぱいのときは、8畳間に13人いました。

・灯油も1缶あったので、それがなくなるまでは。灯油の反射式は1回も使っていませんでしたが、予備にと思って買っておいたのが幸いでした。

・被害のあまりない地区に自宅があったため、警察の待機所や遺体安置所などが置かれました。そのため、停電は3日くらいで直りました。自宅はオール電化だったので。でも、やっぱりカートリッジとかは用意したし、反射式のストーブも用意しておいたので、暖はそんなに。子供にはホッカイロを背負わせたり何だりして、あとはろうそくとか。でも、暗い